

書 評

Yvonne Ivory, *The Homosexual Revival of Renaissance
Style, 1850–1930*
(Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009)

宮 崎 かすみ

男性間の性愛は、キリスト教文化圏では長い間、その名を口にすることさえ許されず、殺人よりも忌み嫌われていた。これを支持する知識人はこのエロスにつきまとう不名誉を拭い正当化するためにヘレニズムの文化的権威に頼った。これが従来の我々の理解だった。1895年、法廷でワイルドが語った「あえて名を名乗らない愛」の有名な弁明は、この論理でもって同性愛を正当化しようとしたものだ。「年長者の年若い者に対する深い愛情は、プラトンがその哲学の礎石としたものです」。しかしワイルドの弁明はここで終わらなかった。それは「さらにミケランジェロやシェイクスピアのソネットにも見いだすことができる」のだと続く。

同性愛を正当化する文化的権威は、古代ギリシャだけではなかった。その背後にルネサンス文化が潜んでいたのである。「同性愛」が医学・法律モデルとして創り出された19世紀後半の英・独には、同時にルネサンス・ブームも起きていた。本書は一見関わりのない二つの事象の背後に通底する精神史の一潮流を見事に手繰り寄せた。ルネサンスという歴史的概念は、セクシュアリティの近代的編制のただ中であって初めて「同性愛者」として括られた人々が自己形成のモデルを求める文化的磁場として機能していたというのである。イギリスに限っても、ウォルター・ペイターがこれをテーマに人騒がせな名著をものし、ジョン・アディントン・シモンズも生涯をかけ浩瀚な大著に取り組んだ。ワイルドとて言わずとしたルネサンス崇拝者だった。同性愛的志向の強かった作家たちが何故に揃ってルネサンスにこだわったか。彼らが、「ルネサンス」という概念の中に、彼ら

の存在とアイデンティティを肯定してくれる強力な論拠を見出したからである。

ルネサンスとは最初の古代ギリシャ復興であり、19世紀後半は二度目のギリシャ復興の時期だった。こう考えれば、ルネサンスという時代が19世紀後半と古代ギリシャを取り持つ役割を担ったのも理解できる。しかも「古代」に惹きつけられた先人たちの時代であるルネサンスは、理想化された古代ギリシャよりも、もっと生々しい時代だった。19世紀末の人々のリアルな経験により近く、もっと悪徳と犯罪に溢れていた。そして人間身体の美を聖職者が嫌がるほど露骨に賞賛し、近代的「個人」に目覚め、その個人の特性を十全まで発達させることが美徳とされた。個性の発達のために社会の規範や法を犯すことがあっても大目に見られた。その意味で犯罪行為すら許容された。個人主義の過度な称揚は時に過激な情熱と放縦を導き、結果として性愛のコードを侵すこともしばしばだったが、これにも寛容だった。ルネサンスのこれら一連の特徴は、19世紀の歴史家たち——とりわけヤーコブ・ブルクハルト——が、15～6世紀のイタリアについて創りあげた「ルネサンス」という概念において繰り返される紋切型である。

ルネサンスがこうした紋切型を伴って19世紀の舞台上に登場するや、性的逸脱者たちはルネサンスの理念に飛びついた。イギリスでは1885年、ドイツでは1871年にそれぞれ刑法が改正され、男性同士の猥褻な行為を取り締まる法律ができた。これにより、これまでの肛門性交を指す「自然に背く罪」とは異なる、「同性愛」という概念が法律のおよび医学的に創出され立ち上げられた。男性を欲望の対象とする男性は、突如、犯罪者となり、脅迫に脅かされる身となった。こうした立場に立たされた同性愛者たちが、法を犯すことなど意にも介さない豪胆なルネサンス人の武勇伝に惹き付けられたのも無理はない。犯罪となり病理とされたこの時代の同性愛を、古代ギリシャの理念だけで正当化するのは限界があった。ワイルドの能弁な弁護とは裏腹に、同じ日の法廷で、ワイルドの相手をした若者たちが詳らかにした具体的な行為の数々は、あの言葉のように美しいものでは到底なかった。理想化されすぎたヘレニズムよりも、人間の生の経験を包含し悪をも正当化できる強力な修辞力を秘めていたのがルネサンスという表象だったのである。本書は第一部で19世紀のルネサンス・ブームと性科学者による

同性愛擁護の議論の結節点を扱い、第二部ではルネサンスに影響を受けた三人の作家を分析するが、以下、本稿では全体の理論的骨格となる一部を中心に紹介したい。

一章「あっぱれな犯罪者たち」では、ルネサンスを特徴づける五つの紋切型の生産にあずかったテキストを分析する。紋切型とは、人生のあらゆる要素における美的洗練、身体美の賞賛、悪徳と犯罪の許容、反倫理的な性行為の蔓延、人格陶冶の推奨と個人主義の勃興である。第二の特徴を「内容に対する形相の勝利」と苦々しく宣するラスキンに対して、男性の肉体美がことさらな関心ごとであるペイターは、身体美の賞揚は、身体の形への表面的な拘泥にとどまらない、形体と内容を一つにしようとする試みだったとしてこれを擁護する。ところがシモンズはルネサンスが発見した身体美を「変質」の比喻で語り、変質論の文脈に接ぎ木してしまう。過度な豪奢さへの志向や放縦な欲望、さらには官能性の発達もルネサンスについての紋切型だが、シモンズは、これらをルネサンス人の「変質」が発現したものと説いた。

犯罪の許容という紋切型は、反倫理的な性行為の蔓延へと導かれた。興味深いのは、ブルクハルトが反倫理的な性行為——姦通、強姦、男色など——をルネサンス人の豊かな想像力に帰したことである。ルネサンスが誇る文化の達成は、高度に発達した想像力の所産であったが、豊かな想像力は時に情熱の激しさとなって現れ、その欲望を充足させようとして反倫理的な性行為の増加を招いた。ルネサンスの個人主義は善も悪をも抱え込まなければ達成できない高度な水準にまで人格を発達させることを要請したが、そこでは奸計や策略とて悪しきものとは見なされない。「恐るべき真実」を隠蔽・操作する巧みな二枚舌を使いこなすことも、高度な人格の資質に含まれていた。ここから19世紀の同性愛者たちは、隠蔽しつつ表すという彼らの性愛の特殊な表現様式を、誇るべき高度な「欺瞞」へと読み替えることを学んだ。

二章「個人主義と倒錯者」では、ルネサンスの紋切型の一つ、自己啓発(self-development)および個人主義という概念が、19～20世紀の同性愛者が自己を正当化するのにいかに利用されたかが分析される。そもそも19世紀には自己のアイデンティティは作り上げるべきものだとする考えがあった。

ルネサンスの概念を唱道した19世紀人たちは、自己啓発は19世紀がルネサンスから引き受けた文化的実践だと考えていた。自己は自分自身が主体的に創る一方、文化的制度によって創られる側面でもあり、この二つのプロセスの弁証法的関係の中で形成されるものであると著者は言う。世紀末に新しく作られた「倒錯」という医学・法律的モデルに自己同一視するのを余儀なくされていた同性愛者たちには、体制からあるタイプを押し付けられるのではなく、自分が主体となって自己を作品として作り上げる自己創出という考え方は大いにアピールした。

倒錯者への批判として、肉体と精神の不一致説があったが、これはドイツの性科学者ウルリッヒが提唱した男性の肉体性の中にある女性の性的欲動という考えを嚆矢とし、その後性科学によって精神病理学的現象として定義された。つまり、倒錯者の男性身体は、内面の女性性によって損なわれ、弱められているとされたのである。ウルリッヒの意図は、生まれつきの現象だから法律で罰するべきでないとする法改正のための主張だったが、結果的に外見と内面性が一致しない病理的存在という倒錯者についての負のイメージを強化することになった。これに対してドイツのフリーランターは、超男性的同性愛という新たなイメージを提供し、損なわれた男性性という批判をかわそうとした。他方、シモンズはホイットマンの詩から全人格的な個人主義思想を読み取り、彼の男性同胞愛から靈感を得て、同性愛者における自己啓発の可能性を導きだした。

三章「毒と情熱と人格、ワイルドにおけるルネサンスの自己創出」では、主に『W・H氏の肖像』の分析を通してワイルドのルネサンス的理念の実践的表現が辿られる。ワイルドがルネサンスと出遭ったのはオックスフォード時代であり、ペイター、ラスキン、シモンズらからルネサンス観を学んだが、世に出た時点でワイルドはルネサンスの紋切型のうち、犯罪、逸脱的性そして審美主義を核に自分の思想を作っていた。ワイルドのルネサンス観が独自のものに深められたのは、1886年、シモンズの『イタリアのルネサンス』が完結した年である。ワイルドはこの時この本の書評を書いているからだ。それ以降、ワイルドは自己啓発、個人主義などについても言及するようになった。その影響の直後に書かれたのが「社会主義下における人間の魂」であるが、本書はルネサンス的個人主義の思想で最も重要

な作品は『W・H氏の肖像』であるとする。これは偽造の主題を中心に据えるが、偽造こそ、美の追求のためには法律を犯すことも厭わないという、ルネサンス的主題を完璧にプロットとして表現したものだからだ。著者は、偽造された肖像画のマニエリスムに着目し、マニエリスムつまりスタイルこそがワイルドにとって創出された自己のパーソナリティを外部に表現したものだとする。そしてワイルドはルネサンスに倣って自身を作品とし、しかも自らをルネサンス人として「偽造」していたという結論へと至る。

四章では、同性愛的志向を持つトマス・マンが、有名作家としての名譽を守りながらも、ルネサンスおよびそれが喚起するエロスともひそかに絆を保っていたからくりが明らかにされる。マンは、ルネサンスかぶれの名家プリングスハイム家の令嬢を娶ることによって、リスペクタビリティを保持しながらもルネサンス世界との蜜月関係を保ち続けていた。

五章では、ヴィタ・サックヴィル・ウェストとヴァージニア・ウルフとの関係が論じられる。好んでルネサンスを舞台に自分の先祖を主人公にした小説を書いていたヴィタに、彼女の恋人のヴァージニアは、彼女をルネサンス時代の少年、オーランドとして設定した小説を書いて捧げた。著者は、ヴィタを少年へと性転換したウルフの手続きに、ルネサンス的な個人が男性としてしか成り立ちえなかったという結論を導いている。

以上、極めて粗雑な概略である。本書が近代の同性愛者とルネサンスという表象の連携という事象を発見したことの意義は大きいものの、難がないわけではない。まず問題なのは、19世紀後半に新たな「同性愛」の犯罪化が起こったにしても、これを初めての犯罪化のように扱っている点である。この曖昧さは、前近代的なソドミーと、近代的な同性愛を区別せずに論じる際の杜撰さにもつながる。この種の記述において、同性愛とソドミーの区別と定義は必須であろう。また、同性愛者における「男性の身体の中の女性の魂」説から、肉体と精神の不一致という問題と、女性の魂を有するがゆえに男性性が損なわれているという問題が引き出されているが、これらはまったく別の問題である。外見と内面が一致しないというのは表象機能の問題であり、男性性が損なわれているというのはマスキュリニティの問題だ。さらに、外見と内面の不一致という非難に抗して同性愛者が提示した議論として紹介されたホイットマンやカーペンターの全人格的個

人主義の思想は、この主題を正しく受けておらず、牽強附会の感がある。むしろ、ワイルドの「仮面の思想」に論を進めるべきであったろう。最後に、シモンズがルネサンスを変質の観点から説明したことを批判的に検討していない点も問題である。そもそもシモンズの時代に「変質」は、同性愛を病理化する際の最も有力な論拠だった。これを、シモンズが同性愛を擁護するルネサンスの歴史記述において使ったというのは、シモンズの思考の根本に矛盾があったということだ。この重要な問題に何らの言及もないというのでは、片手落ちの批判は免れない。着想は秀逸だが、その着想を広げてゆくための議論を支える論理的構築力には大いに不足を感じた。繰り返しの多い冗長な文章が議論の迷走を助長していた点も残念である。